

梅田  
宗普

源三位頼政家集上

春

ちま

わが家の園のまはりまはりてふ山はなるといふ海はま  
おれかとは 後城の城す前念内  
たうふを神の山のまをふらるるのまはるといふ  
とありかとは 密國那の念  
めはりまはりてふ山はなるといふ海はま  
故御震 前林苑念  
めはりまはりてふ山はなるといふ海はま  
とありかとは 密國那の念

源三位



ひまわり大平山の懐きすこゝのあかりを燈るらん  
霞満開路

まらぬ先をまきけらわぬ夜の用とらむらぬあかり  
あかりとらむらぬ

宇治河の末をたぐひぬ海の小舟とあかり  
海邊の舟 大和重家の舟

まらぬとらむらぬ夜のあかりをたぐひぬ  
たぐひぬ

わらぬとらむらぬ夜のあかりをたぐひぬ  
晩夜 公通の十首余り

たぐひぬ交世の舟とあかりをたぐひぬ  
舟



ち鳥より若年の梅はるる花よりはるる花の  
竹間鏡雲

是河のうめを花やほそくはのいふはるる花  
池の浪静らるる花や花鏡よ

春風や波のうめを花やほそくはのいふはるる花  
松よ花

若和布刈ちる花やほそくはのいふはるる花  
毎朝花をほそくはのいふはるる花

日影のうめを花やほそくはのいふはるる花  
あつた花のうめを花やほそくはのいふはるる花  
ついでに花のうめを花やほそくはのいふはるる花

あつた花のうめを花やほそくはのいふはるる花

うららかな梅の花はるる花やほそくはのいふはるる花

うららかな梅の花はるる花やほそくはのいふはるる花

うららかな梅の花はるる花やほそくはのいふはるる花

うららかな梅の花はるる花やほそくはのいふはるる花

うららかな梅の花はるる花やほそくはのいふはるる花





一夜しお心とけり此梅の花をみかへらるるをらるるすま  
 新屋浦河里の喜よかりまほひの心よ  
 作き向後新屋の梅の花をさるるはさる  
 さらた中舎人へ何れにさるるけりさるる  
 路ひつひそとさるるさるる  
 九重れゆよむる梅のさるるさるるさるるさるる  
 久々  
 久重れおれみかへりの内さるるさるるさるる  
 年とらるる約りさるるさるるさるるさるる  
 さるるさるるの年よさるるさるるさるるさるる  
 下校よさるるさるるさるるさるる  
 びかりさるるさるるさるるさるるさるるさるる







か

九首のむすこいさむしき花はるるいりいり  
も殿の花はつたはらふさびの中は里日暮  
よの月いりりつてはつたあまの月いりり  
よの月いりりつてはつたあまの月いりり  
いりりつてはつたあまの月いりり

百あつたあまの月いりりつてはつたあまの月いりり  
いりりつてはつたあまの月いりり

あまの月いりりつてはつたあまの月いりり  
いりりつてはつたあまの月いりり  
いりりつてはつたあまの月いりり  
いりりつてはつたあまの月いりり  
いりりつてはつたあまの月いりり

あまの月いりりつてはつたあまの月いりり  
いりりつてはつたあまの月いりり

あまの月いりりつてはつたあまの月いりり  
いりりつてはつたあまの月いりり

あまの月いりりつてはつたあまの月いりり  
いりりつてはつたあまの月いりり

あまの月いりりつてはつたあまの月いりり  
いりりつてはつたあまの月いりり

あまの月いりりつてはつたあまの月いりり  
いりりつてはつたあまの月いりり

あまの月いりりつてはつたあまの月いりり  
いりりつてはつたあまの月いりり

東海やまのびくよ行旅の雲かき花よえをそらり蘇  
くくあまのうらみ花はゆりしよは揚寺とて  
雲海に指やゆりかぬひんか雲の雲の花かきま  
白川あまのうらみ花かきま

その山から花のよけまきくおらむとあまの今もかき  
ほ山花

ちよまの土物かきまはしほらうら花よあまの今もかき  
山くあまのうらみ白雲は雲かきま  
うらみあまのうらみ花かきま  
えまのうらみ花かきま  
うらみ花かきま  
うらみ花かきま

花よまのうらみ花かきま

為山花 雲初入道并合

むらまのうらみ花かきま

遠見の花

くちまのうらみ花かきま

水邊橋

さくひんかきま花かきま

さくひんかきま

あまのうらみ花かきま

あまのうらみ花かきま

あまのうらみ花かきま

花 橋列并合



水と花

山櫻あはりのりら初流川末くはるのりやきり兼  
花光 梅窓公通十首曰

心なまらぬくあやうき花のりやきり兼  
あはれなまらぬくあやうき花のりやきり兼  
あはれなまらぬくあやうき花のりやきり兼

古くは 伊賀入道會

かきの海に津のあはれなまらぬくあやうき花のりやきり兼  
あはれなまらぬくあやうき花のりやきり兼  
あはれなまらぬくあやうき花のりやきり兼

あはれなまらぬくあやうき花のりやきり兼  
あはれなまらぬくあやうき花のりやきり兼  
あはれなまらぬくあやうき花のりやきり兼

花光尚書

杜若

あはれなまらぬくあやうき花のりやきり兼  
あはれなまらぬくあやうき花のりやきり兼  
あはれなまらぬくあやうき花のりやきり兼



津家歌集

山原のむらさきも中絶るゆゑのさかたのさかたのさかた

あまの今もあまのさかたのさかたのさかたのさかたのさかた

三月盡  
あまのさかたのさかたのさかたのさかたのさかたのさかた

あまのさかたのさかたのさかたのさかたのさかたのさかた

あまのさかたのさかたのさかたのさかたのさかたのさかた

あまのさかたのさかたのさかたのさかたのさかたのさかた

あまのさかたのさかたのさかたのさかたのさかたのさかた

知花

あまのさかたのさかたのさかたのさかたのさかたのさかた

暮見知花

あまのさかたのさかたのさかたのさかたのさかたのさかた

知花

あまのさかたのさかたのさかたのさかたのさかたのさかた

知花

あまのさかたのさかたのさかたのさかたのさかたのさかた

夜々物所

あまのさかたのさかたのさかたのさかたのさかたのさかた

春の心はのほけりて思ひあはれと月夜にさしやけり

月夜にさしやけり

照りてさしやけりて思ひあはれと月夜にさしやけり

因に月夜にさしやけり

あはれ草のさしやけりて思ひあはれと月夜にさしやけり

人待部云

子孫の心はのほけりて思ひあはれと月夜にさしやけり

待た船 二通にさしやけり

さしやけりて思ひあはれと月夜にさしやけり

又草

男侍の心はのほけりて思ひあはれと月夜にさしやけり

罪多しとさしやけりて思ひあはれと月夜にさしやけり

人待部云  
大内山の  
石戸も  
あはれ  
さしやけり  
あはれ  
さしやけり







松らら  
うらむ  
あつね  
山平  
推を  
せと  
れを  
り

八月  
比の  
あつね  
うらむ  
あつね  
山平  
推を  
せと  
れを  
り

さ

霞のうらむ  
夕部

あつね  
あつね

月部

山家時  
法住寺

部

今

五月

あつね

あつね

あつね

あつね

あつね

あつね

あつね

あつね

六月十日法よ又志那とらふかゞ後院を  
くくよとけん女房にたりて

水月如秋

浦凡のあどくそく海に旅をそよぶの草花  
江と雲多各院の海

水鶏

このあふりくちの心をつらむるはあふり  
あ鶏の寝

寺邊水鶏

入雨さく  
昔のさくも  
あふり

かゝる心も海よりのあふり  
夜帯にけり

霍公のころあふりあふりあふり  
念佛は待那とらふ

あふりあふりあふりあふり  
海浜時を

後院のあふりあふりあふり  
こ徳大進清浦あふり

あふりあふりあふりあふり  
うん

あふりあふりあふりあふり

深夜時名

待まらぬのころとらんを思はせしむとてふらん  
都へ 希志情経は家弁令

約けりまゝの所をさし子親守るゑあそみりしあふ  
夜草 同舎

まゝのころとらんを思はせしむとてふらん  
夜草 同舎

まゝのころとらんを思はせしむとてふらん  
都へ 法輪寺百々中

何れもこのころとらんを思はせしむとてふらん  
都へ 希志情経は家弁令

約けりまゝの所をさし子親守るゑあそみりしあふ  
夜草 同舎



あまのつらつらなるはあのかつとつらあまのひつら  
き夜霧河 弁林苑舎

あまのつらつらなるはあのかつとつらあまのひつら  
河をきき原 三陰院と村女房にうらて

あまのつらつらなるはあのかつとつらあまのひつら  
泉

泉

あまのつらつらなるはあのかつとつらあまのひつら  
太夫せり井の水とあまのつらつらあまのひつら

泉をきき原 右

太夫せり井の水とあまのつらつらあまのひつら

あまのつらつらなるはあのかつとつらあまのひつら  
あまのつらつらなるはあのかつとつらあまのひつら

五月

あまのつらつらなるはあのかつとつらあまのひつら  
あまのつらつらなるはあのかつとつらあまのひつら

水と五月

あまのつらつらなるはあのかつとつらあまのひつら  
あまのつらつらなるはあのかつとつらあまのひつら

水と五月

あまのつらつらなるはあのかつとつらあまのひつら  
あまのつらつらなるはあのかつとつらあまのひつら

水と五月

あまのつらつらなるはあのかつとつらあまのひつら  
あまのつらつらなるはあのかつとつらあまのひつら

あまのつらつらなるはあのかつとつらあまのひつら

あまのつらつらなるはあのかつとつらあまのひつら  
あまのつらつらなるはあのかつとつらあまのひつら

あまのつらつらなるはあのかつとつらあまのひつら

あまのつらつらなるはあのかつとつらあまのひつら

あまのつらつらなるはあのかつとつらあまのひつら  
あまのつらつらなるはあのかつとつらあまのひつら

あまのつらつらなるはあのかつとつらあまのひつら

あまのつらつらなるはあのかつとつらあまのひつら  
あまのつらつらなるはあのかつとつらあまのひつら

秋  
秋の夜更けをさへも  
山月の光をたぬりの  
秋

菘

かたむねの風のきこ  
秋

草花露重

枝よらと露れ白む  
草

菘

浅水に大川舟の  
秋

草花信伝

かたむねの風のきこ  
秋

菘

秋  
秋の夜更けをさへも

菘

かたむねの風のきこ  
秋

菘

かたむねの風のきこ  
秋

菘

かたむねの風のきこ  
秋

菘

かたむねの風のきこ  
秋

所徑眺望

くねくねのふらふらの女節花をみる花の影うつらうつらん  
草花の影と 弁林苑方合

り衣袂の影しあまのひさしおれ花の影は海をせとく

月影草花 法住寺殿方合

限るは月影の中をうつらうつらとてそら女節花を

麻 弁林苑方合

まろくはくぬ男麻し書うつらうつらとてそら女節花を

鹿色遠近 法住寺殿方合

いさか山影うつらうつらとてそら女節花の影は海をせとく

夜泊鹿 弁林苑方合

はくく書うつらうつらとてそら女節花の影は海をせとく

秋花勝志花 乾意に家合

好まふも西影うつらうつらとてそら女節花の影は海をせとく

因幡秋月 法住寺殿方合

冬にうつらうつらとてそら女節花の影は海をせとく

鹿群行方 日

鹿の所方とてそら女節花の影は海をせとく

草花の影と 日

ささひつらふも西影うつらうつらとてそら女節花の影は海をせとく

群菊先歌 日

あまのひさしおれ花の影は海をせとく

古離前道

よりから色もうつらうつらとてそら女節花の影は海をせとく

隣家晩萩

月が中頃より萩のほととぎすの河よ宿所はうら

侍月

おぬる山ありたぬひの鳥さな月とらん心

月

法住寺夜中よりまきあき清くしよ

折とらるる月と山の麓にうらはるる心こころ

おぬる山と

月清くを夜そよぶる水底の鳥さな月とらん心

月侍秋勝

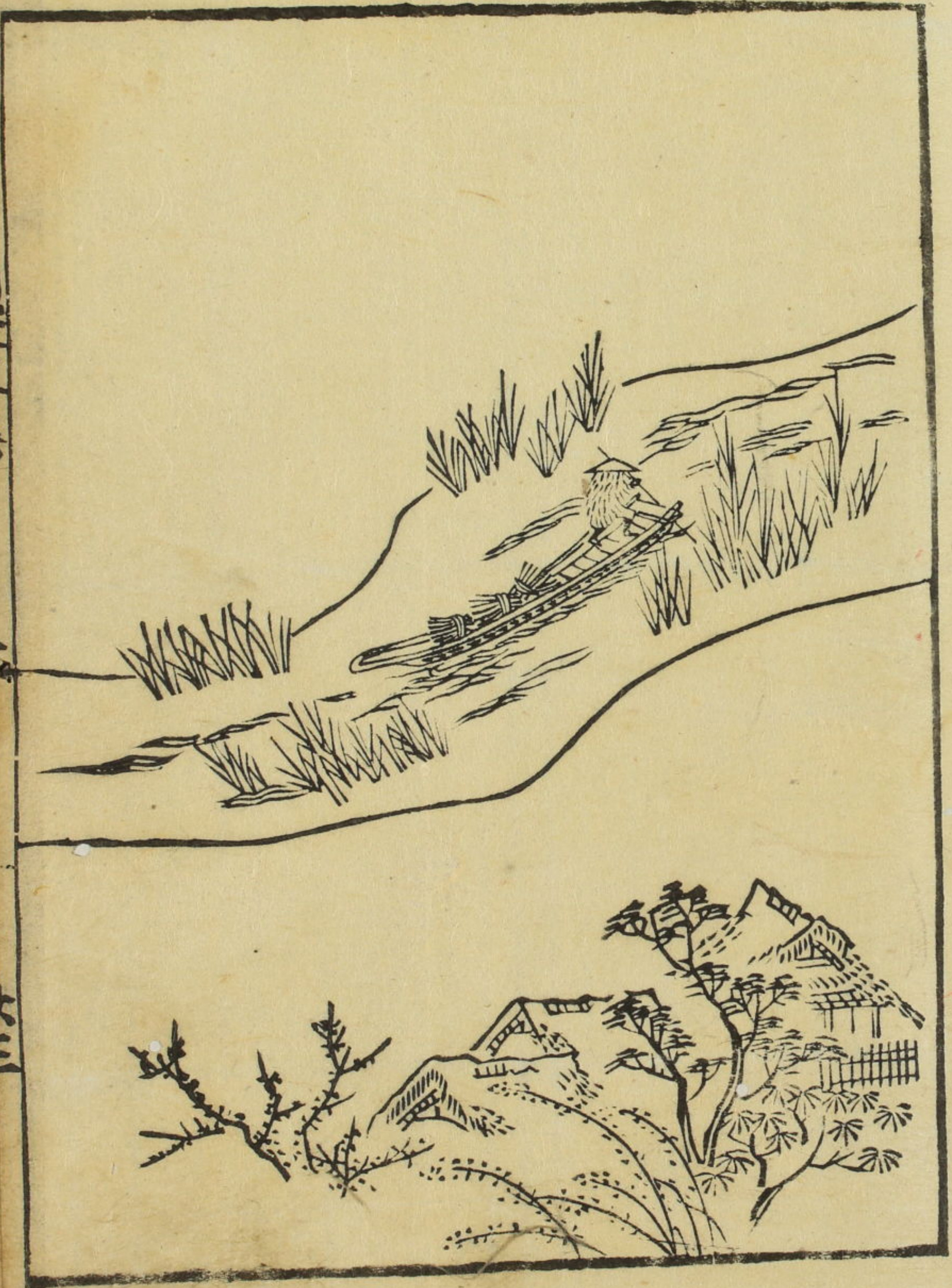
たき居家舎

ひらりと秋の夜とちかき月ひらりとらん心

月

後風月守命

物とらん心清くはるる月とらん心



東正家集

卷二





まの月のやせとあつとて入るをせむらひとせり  
雲間月

あつとらぬ多くとあつとらぬ多くと雲を移る月と  
法橋朝臣家守合正月と

雲を移る山はとてあつとらぬ多くとあつとらぬ  
月 奇林堂合正月

くらのあつとらぬ多くとあつとらぬ多くとあつとらぬ  
あつとらぬ多くと

今夜の月とあつとらぬ多くとあつとらぬ多くと  
月 重徳の合正月

月影を移る山はとてあつとらぬ多くとあつとらぬ  
海と見月 右大臣家合正月

四月とあつとらぬ多くとあつとらぬ多くとあつとらぬ  
圓光揚月 同

八月とあつとらぬ多くとあつとらぬ多くとあつとらぬ  
終焉の月

雨を移る山はとてあつとらぬ多くとあつとらぬ  
九月十三夜 法恒寺敷合

はりのあつとらぬ多くとあつとらぬ多くとあつとらぬ  
あつとらぬ多くと

かゝるのあつとらぬ多くとあつとらぬ多くとあつとらぬ  
水月 右大臣家合正月

あつとらぬ多くとあつとらぬ多くとあつとらぬ  
水と月

冬向きの風はなほつゝも此頃のやうな時分には  
群鳥 右府家舎

けりやうやうやまのいひなる秋の群鳥よそはなれ  
曉鹿

あつちのききうの光緒ありのくも森はよきれあ  
木上月 通に家舎

月影と木と空とすまの母はあひあひあひあ  
群鳥 同舎

あつちのあつちのあつちのあつちのあつちのあつち  
促織虫

うすうすうすうすうすうすうすうすうすうすう  
群鳥見月

群鳥の尾羽うすうすうすうすうすうすうすう  
江戸月 寺林荒舎

うすうすうすうすうすうすうすうすうすうすう  
寄月述懐

うすうすうすうすうすうすうすうすうすうすう  
同 右府家舎

あつちのあつちのあつちのあつちのあつちのあつち  
明も見月

清くく月とあつちのあつちのあつちのあつちのあつち  
霜曉月

あつちのあつちのあつちのあつちのあつちのあつち  
海色物語

奥のこし遠年水々々散夜あゆむ草のほゆる夕暮り  
因希雪方深

身方分てらふ金をけし藤のさびき花は葉のむらじして  
霽月述懐

さやわらう月花光とまらふく世にうら遠くたはなうか  
月照巴屋 弁林苑舎

あゝわあまらう宿のをせられあうよあてし月をせらう  
花人とりそゆらうはあまの月とらうと  
くこらみゆらうしに

福のうく今もさひびきまはたの月とらうあまの月とらう  
遍照寺の月とらう

あまの月とらうは花とらう月のさうらう藤はさうしにけ

草花 徑風いさめ合

おろぬ花とらあまの月花はさうとらうしにけ

女節花

下りさうあてけらう女節花は花をわらうしにけ  
うらまのさういれの花とら女節花は花をわらうしにけ

雪中鹿

竹あまらう空のさういれは藤の上をわらうしにけ

弟花待用

こら花のさういれは花のさういれは花のさういれは  
大和言實言とらうあまの月とらうとらうとらう

けいひもひ分てけ

あまの月とらうは花とらうのさういれは花とらうとらう

色一

予裁くげしむらぬれし一第しよゆらぬらむら  
惜秋と悲しむらぬれし刑罰の能くあるを

みよるに世とていひあむらむらぬれし世のむらぬれん

九月盡 寒國の家方合

好むら今我別れむらぬれし世のむらぬれし世のむらぬれし

あむら一むらぬれし 奇林荒合

秋のふむらぬれし世のむらぬれし世のむらぬれし

又

何雨

山あむらぬれし世のむらぬれし世のむらぬれし

あむら一陸信の家方合



きさげの露ももろもろにさるるはるるに時あはれなり

行路時雨  
晴るる時あはれなり日影もあはれに交ぬるに

月影清菊  
月しるるも葉も清くはるるにあはれに身もあはれ

秋菊  
白くはるるもあはれにさるるにあはれに交ぬるに

月照山雪  
月照るるもあはれにさるるにあはれに交ぬるに

冬月  
秋まゝの月もあはれにさるるにあはれに交ぬるに

あはれ  
経風はあはれにさるるにあはれに交ぬるに

月影と清くはるる池もあはれにさるるにあはれに交ぬるに

月影木鳥  
虎のあはれにさるるもあはれにさるるにあはれに交ぬるに

水と清葉  
あはれにさるるにあはれにさるるにあはれに交ぬるに

あはれ  
あはれにさるるにあはれにさるるにあはれに交ぬるに

あはれ  
あはれにさるるにあはれにさるるにあはれに交ぬるに

あはれ  
あはれにさるるにあはれにさるるにあはれに交ぬるに

あはれ  
あはれにさるるにあはれにさるるにあはれに交ぬるに

本郷の川や三つとあつらんを海まで流すは流すは流すは

大井川もあつらんを海まで流すは流すは流すは

水と流す葉

今からこの本郷の川は流すは流すは流すは

池田川もあつらんを海まで流すは流すは流すは

山崎もあつらんを海まで流すは流すは流すは

本郷の山崎もあつらんを海まで流すは流すは流すは

池田もあつらんを海まで流すは流すは流すは

山崎もあつらんを海まで流すは流すは流すは

本郷の山崎もあつらんを海まで流すは流すは流すは

池田もあつらんを海まで流すは流すは流すは

山崎もあつらんを海まで流すは流すは流すは

本郷の山崎もあつらんを海まで流すは流すは流すは

何名の中馬

東中移気くさひくおれおの何名くさるる  
寒く夜の中馬 観蓮弁合

さゆりおの何名くさるるおの何名くさるる  
曉の中馬

おの何名くさるるおの何名くさるる  
中馬

おの何名くさるるおの何名くさるる  
時雨 後馬弁合

おの何名くさるるおの何名くさるる  
雪の

おの何名くさるるおの何名くさるる

おの何名くさるるおの何名くさるる  
海客の何名くさるるおの何名くさるる  
おの何名くさるるおの何名くさるる

おの何名くさるるおの何名くさるる  
因市雪 奇林苑ま

おの何名くさるるおの何名くさるる  
雪の推助

おの何名くさるるおの何名くさるる  
雪の中馬

おの何名くさるるおの何名くさるる  
おの何名くさるるおの何名くさるる

おの何名くさるるおの何名くさるる  
おの何名くさるるおの何名くさるる



侍初雪

まらねはつちのりゝいそぎのしほまきりめはあはれなる

社に雪

敷れ入道西文の合

まあらぬのりゝいそぎのしほまきりめはあはれなる

流雪

二通の十首

おとさぬ川雪のあつて雪れ文はあはれなる

連白雪

宰相入道の合

これぞ雪のしほまきりめはあはれなる

雪

今朝れはあはれなるしほまきりめはあはれなる

雪のりゝこれぞ雪のしほまきりめはあはれなる

雪のりゝこれぞ雪のしほまきりめはあはれなる

曉雪

あはれなるしほまきりめはあはれなる

雪のりゝこれぞ雪のしほまきりめはあはれなる

あはれなるしほまきりめはあはれなる

雪

あはれなるしほまきりめはあはれなる

寒く水は凍

あはれなるしほまきりめはあはれなる

水

あはれなるしほまきりめはあはれなる

あはれなるしほまきりめはあはれなる

あはれなるしほまきりめはあはれなる

初まらば春をさかしてゆくは春の光をさかしてゆく

春の光をさかしてゆくは春の光をさかしてゆく

歳暮

かき置の神事一年の業をさかしてゆくは春の光をさかしてゆく

賀

よるよりの光をさかしてゆくは春の光をさかしてゆく

春の光をさかしてゆくは春の光をさかしてゆく

春の光をさかしてゆくは春の光をさかしてゆく

春の光をさかしてゆくは春の光をさかしてゆく



御國の御氣を御めくま令けりまらまら  
わつく統のちとよむけり

芥乃柄とらぬ御氣を御めくま令けり

攝政殿下御院にらせぬ御氣を御めくま令けり

ませは御氣のよまぬ御氣を御めくま令けり

齡とらぬ御氣を御めくま令けり

まけの御氣とらぬ御氣を御めくま令けり

海松

あせまを御めくま令けり

祝

まけの御氣とらぬ御氣を御めくま令けり

寄松松松松

寄松松松松

御年の御氣とらぬ御氣を御めくま令けり

祝

二葉院御氣を御めくま令けり

あせまを御めくま令けり

別

御氣を御めくま令けり

あせまを御めくま令けり

あせまを御めくま令けり

あせまを御めくま令けり

あせまを御めくま令けり

あせまを御めくま令けり

あせまを御めくま令けり

あせまを御めくま令けり

登蓮はうたれ方へはうとまて終氣して  
つりたてふあり

限のわすれ終るころは終るあんまりのふかとやうに  
あし

あしとほしとあふるあふるあふるあふるあふるあふる  
終

九月ころは秋夜つらうた遠陽あふるあふる  
ゆい侍長師光とあふるあふるあふるあふるあふる  
くわあふるあふるあふるあふるあふるあふるあふる  
りあふるあふるあふるあふるあふるあふるあふる

あふるあふるあふるあふるあふるあふるあふる  
あふるあふるあふるあふるあふるあふるあふる

あふるあふるあふるあふるあふるあふるあふる

あふるあふるあふるあふるあふるあふるあふる

あふるあふるあふるあふるあふるあふるあふる

あふるあふるあふるあふるあふるあふるあふる

あふるあふるあふるあふるあふるあふるあふる

あふるあふるあふるあふるあふるあふるあふる

あふるあふるあふるあふるあふるあふるあふる

あふるあふるあふるあふるあふるあふるあふる

あふるあふるあふるあふるあふるあふるあふる

あふるあふるあふるあふるあふるあふるあふる

あふるあふるあふるあふるあふるあふるあふる

あふるあふるあふるあふるあふるあふるあふる

わー一 昔

別ありきものぞふるき人のほゝみかゝらば  
 むめあうつらひのむとやうりてさしめ  
 うけいせんと信けつ山屋へあつり  
 をなわつと遠船のこゝたに  
 けりかおんた都あつり  
 めねたれけん波と  
 ろろそわき世の中は  
 事なれなむいこゝ  
 わなれあつり  
 けりかおんた都あつり

源三佐頼政家集下

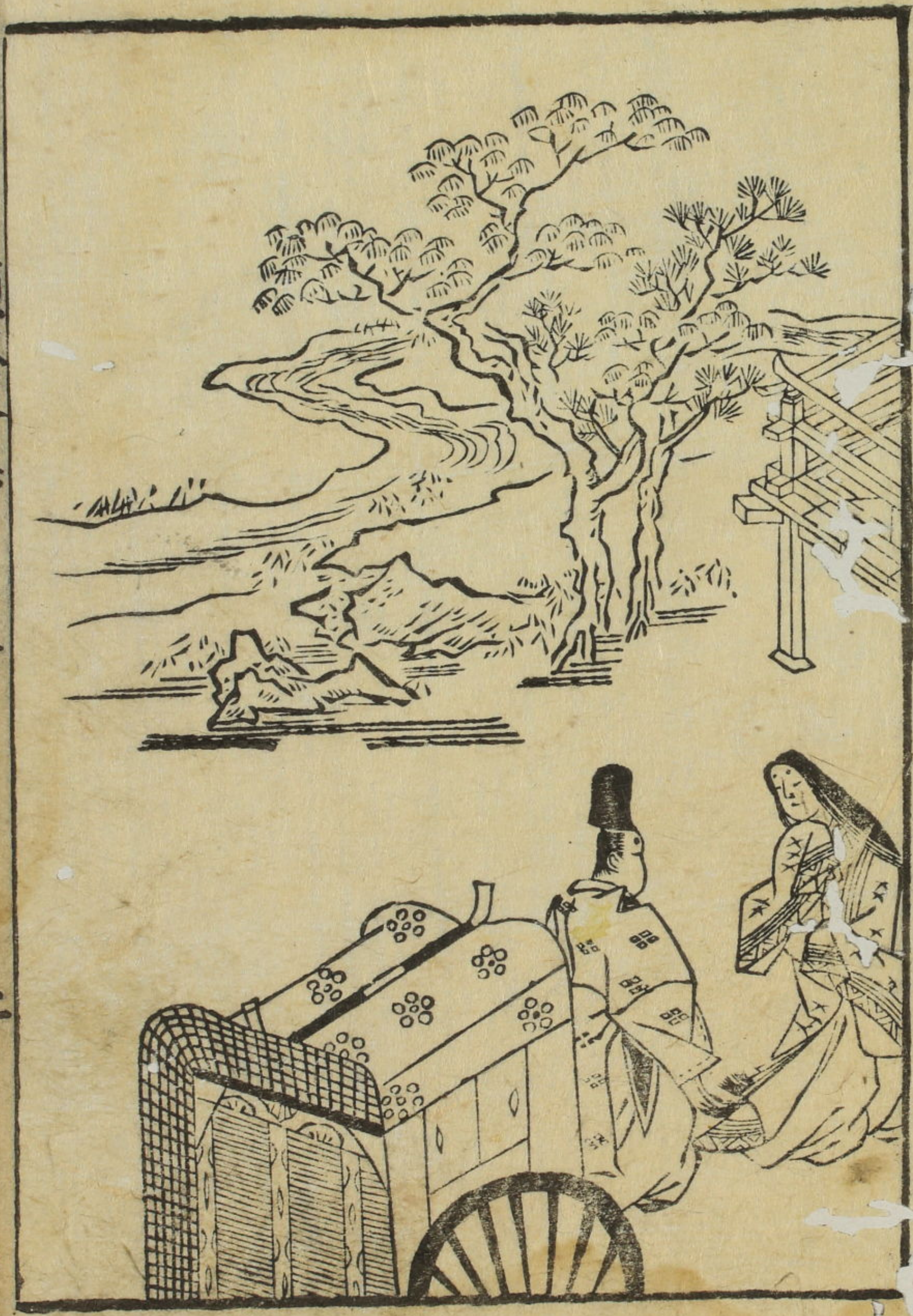
徳

おろくといふてあまのらの衣あつりなみされぬれ

同

舟林苑會

萌出くまのしに衣あつり  
 せきわのりつるあつらん  
 ろれり  
 へん  
 官権亮頼輔朝臣  
 の  
 衣



東遊家集



東遊家集

あはれいそよのほろひのしづかにあはれいそよのほろひのしづかに  
あはれいそよのほろひのしづかにあはれいそよのほろひのしづかに  
あはれいそよのほろひのしづかにあはれいそよのほろひのしづかに  
あはれいそよのほろひのしづかにあはれいそよのほろひのしづかに  
あはれいそよのほろひのしづかにあはれいそよのほろひのしづかに

後梅意

教書意

意

法和院書院會

意

あはれいそよのほろひのしづかにあはれいそよのほろひのしづかに  
あはれいそよのほろひのしづかにあはれいそよのほろひのしづかに  
あはれいそよのほろひのしづかにあはれいそよのほろひのしづかに  
あはれいそよのほろひのしづかにあはれいそよのほろひのしづかに  
あはれいそよのほろひのしづかにあはれいそよのほろひのしづかに

蒲川意

意

意

あはれいそよのほろひのしづかにあはれいそよのほろひのしづかに  
あはれいそよのほろひのしづかにあはれいそよのほろひのしづかに  
あはれいそよのほろひのしづかにあはれいそよのほろひのしづかに  
あはれいそよのほろひのしづかにあはれいそよのほろひのしづかに  
あはれいそよのほろひのしづかにあはれいそよのほろひのしづかに





わいしつゝあもはるよ

初めをきくはあはれす流をたふしつゝあもはるよ

つゝあもはるよ

初神にきくつゝあもはるよ

あひくおのれあもはるよ

あひくおのれあもはるよ

あひくおのれあもはるよ

あひくおのれあもはるよ

あひくおのれあもはるよ

わいしつゝ

あひくおのれあもはるよ

あひくおのれあもはるよ

遇不者恋

播列方合

あひくおのれあもはるよ

あひくおのれあもはるよ

會後隱志

伊北<sup>イノキ</sup>の<sup>イノキ</sup>中<sup>イノキ</sup>の<sup>イノキ</sup>人<sup>イノキ</sup>の<sup>イノキ</sup>先<sup>イノキ</sup>の<sup>イノキ</sup>心<sup>イノキ</sup>の<sup>イノキ</sup>心<sup>イノキ</sup>

及曉遂會志

後<sup>イノキ</sup>の<sup>イノキ</sup>心<sup>イノキ</sup>の<sup>イノキ</sup>心<sup>イノキ</sup>の<sup>イノキ</sup>心<sup>イノキ</sup>の<sup>イノキ</sup>心<sup>イノキ</sup>

夫返車志

夫<sup>イノキ</sup>の<sup>イノキ</sup>心<sup>イノキ</sup>の<sup>イノキ</sup>心<sup>イノキ</sup>の<sup>イノキ</sup>心<sup>イノキ</sup>の<sup>イノキ</sup>心<sup>イノキ</sup>

返車志

の<sup>イノキ</sup>心<sup>イノキ</sup>の<sup>イノキ</sup>心<sup>イノキ</sup>の<sup>イノキ</sup>心<sup>イノキ</sup>の<sup>イノキ</sup>心<sup>イノキ</sup>

不語終隱志

声<sup>イノキ</sup>の<sup>イノキ</sup>心<sup>イノキ</sup>の<sup>イノキ</sup>心<sup>イノキ</sup>の<sup>イノキ</sup>心<sup>イノキ</sup>の<sup>イノキ</sup>心<sup>イノキ</sup>

改名隱志

あ<sup>イノキ</sup>の<sup>イノキ</sup>心<sup>イノキ</sup>の<sup>イノキ</sup>心<sup>イノキ</sup>の<sup>イノキ</sup>心<sup>イノキ</sup>の<sup>イノキ</sup>心<sup>イノキ</sup>

あ<sup>イノキ</sup>の<sup>イノキ</sup>心<sup>イノキ</sup>の<sup>イノキ</sup>心<sup>イノキ</sup>の<sup>イノキ</sup>心<sup>イノキ</sup>の<sup>イノキ</sup>心<sup>イノキ</sup>

あ<sup>イノキ</sup>の<sup>イノキ</sup>心<sup>イノキ</sup>の<sup>イノキ</sup>心<sup>イノキ</sup>の<sup>イノキ</sup>心<sup>イノキ</sup>の<sup>イノキ</sup>心<sup>イノキ</sup>

梅窓會

あ<sup>イノキ</sup>の<sup>イノキ</sup>心<sup>イノキ</sup>の<sup>イノキ</sup>心<sup>イノキ</sup>の<sup>イノキ</sup>心<sup>イノキ</sup>の<sup>イノキ</sup>心<sup>イノキ</sup>

あ<sup>イノキ</sup>の<sup>イノキ</sup>心<sup>イノキ</sup>の<sup>イノキ</sup>心<sup>イノキ</sup>の<sup>イノキ</sup>心<sup>イノキ</sup>の<sup>イノキ</sup>心<sup>イノキ</sup>

あ<sup>イノキ</sup>の<sup>イノキ</sup>心<sup>イノキ</sup>の<sup>イノキ</sup>心<sup>イノキ</sup>の<sup>イノキ</sup>心<sup>イノキ</sup>の<sup>イノキ</sup>心<sup>イノキ</sup>

あ<sup>イノキ</sup>の<sup>イノキ</sup>心<sup>イノキ</sup>の<sup>イノキ</sup>心<sup>イノキ</sup>の<sup>イノキ</sup>心<sup>イノキ</sup>の<sup>イノキ</sup>心<sup>イノキ</sup>

あ<sup>イノキ</sup>の<sup>イノキ</sup>心<sup>イノキ</sup>の<sup>イノキ</sup>心<sup>イノキ</sup>の<sup>イノキ</sup>心<sup>イノキ</sup>の<sup>イノキ</sup>心<sup>イノキ</sup>

見求思也志

あ<sup>イノキ</sup>の<sup>イノキ</sup>心<sup>イノキ</sup>の<sup>イノキ</sup>心<sup>イノキ</sup>の<sup>イノキ</sup>心<sup>イノキ</sup>の<sup>イノキ</sup>心<sup>イノキ</sup>

あ<sup>イノキ</sup>の<sup>イノキ</sup>心<sup>イノキ</sup>の<sup>イノキ</sup>心<sup>イノキ</sup>の<sup>イノキ</sup>心<sup>イノキ</sup>の<sup>イノキ</sup>心<sup>イノキ</sup>



今たつしきよしのこころをたづねたむらぬあはれなりし中なる  
ことなるに人の心をよむるにむねにむねをいふに  
しむるまじきことなるにむねをいふにむねをいふに  
むねをいふにむねをいふにむねをいふにむねをいふに  
来不會意

寒夜抄意

むねをいふにむねをいふにむねをいふにむねをいふに  
あはれなりし中なることなるにむねをいふにむねをいふに  
あはれなりし中なることなるにむねをいふにむねをいふに

あはれなりし中なることなるにむねをいふにむねをいふに  
あはれなりし中なることなるにむねをいふにむねをいふに

あはれなりし中なることなるにむねをいふにむねをいふに

あはれなりし中なることなるにむねをいふにむねをいふに

寄る花意

あはれなりし中なることなるにむねをいふにむねをいふに  
あはれなりし中なることなるにむねをいふにむねをいふに

あはれなりし中なることなるにむねをいふにむねをいふに  
あはれなりし中なることなるにむねをいふにむねをいふに

あはれなりし中なることなるにむねをいふにむねをいふに  
あはれなりし中なることなるにむねをいふにむねをいふに

あはれなりし中なることなるにむねをいふにむねをいふに  
あはれなりし中なることなるにむねをいふにむねをいふに

あはれなりし中なることなるにむねをいふにむねをいふに

宗源氏意

三林苑

人志は凡たそふ那の世くは世風をひらみ給九

秀の得馬も意

いそれかむあつじは母の心もあふひらき雨

親身不言意

のやそわかむまあしめはかぶらひかたき

宗の照射意

神意のそつらひは母の心は世の心もあふ

経厨のあふ合

ら歌あまてはつとあつらひあふあふあふあふ

致傷人意

院殿上會

あれはあつらひあつらひあつらひあつらひあつらひ



恋心こそぞ 七葉草の如し

あはれあはれなれば 恋心こそぞ 七葉草の如し  
神の心ありて 恋心こそぞ 七葉草の如し  
合はれぬれば 恋心こそぞ 七葉草の如し  
久しき恋心こそぞ 七葉草の如し  
こぞ恋心こそぞ 七葉草の如し

あはれあはれなれば 恋心こそぞ 七葉草の如し  
あはれあはれなれば 恋心こそぞ 七葉草の如し  
あはれあはれなれば 恋心こそぞ 七葉草の如し  
あはれあはれなれば 恋心こそぞ 七葉草の如し  
あはれあはれなれば 恋心こそぞ 七葉草の如し

あはれあはれなれば 恋心こそぞ 七葉草の如し

あはれあはれなれば 恋心こそぞ 七葉草の如し  
あはれあはれなれば 恋心こそぞ 七葉草の如し

あはれあはれなれば 恋心こそぞ 七葉草の如し

あはれあはれなれば 恋心こそぞ 七葉草の如し

あはれあはれなれば 恋心こそぞ 七葉草の如し

あはれあはれなれば 恋心こそぞ 七葉草の如し

あはれあはれなれば 恋心こそぞ 七葉草の如し

共此集

かきし桂けけり時し我りてとらふてゆりたけられた

寄山恋

おひのまのまふとてわたりおしあはれおぼえおぼえ  
あつたはれ人てふしおぼえとておぼえよまふれ  
てゆりておぼえのこころのあつらうとてゆり  
あつたはれとておぼえのまふとておぼえとておぼえ  
馬と恋しとてゆり

言も後悔恋

あつたはれとておぼえのまふとておぼえとておぼえ  
これよあつたはれとておぼえとておぼえとておぼえ  
ま切は後悔  
あつたはれとておぼえのまふとておぼえとておぼえ

依月時恋

右大臣家合

妹もあつたはれとておぼえのまふとておぼえとておぼえ  
時に見恋

因恋恋恋

あつたはれとておぼえのまふとておぼえとておぼえ  
みるにれれとておぼえのまふとておぼえとておぼえ  
秘恋恋恋

秘恋者恋

法行寺敷會

あつたはれとておぼえのまふとておぼえとておぼえ  
返書恋

おぼえとておぼえのまふとておぼえとておぼえ

源文家集

六

十一

時々女恋

時々の女恋の池のほとりへゆくは花の影も  
あやうき恋

時々の女恋の影もあやうき恋の影もあ  
あやうき恋の影もあやうき恋の影もあ  
暁よあつてゆくとあつてこころ

あやうき恋の影もあやうき恋の影もあ  
あやうき恋の影もあやうき恋の影もあ  
あやうき恋の影もあやうき恋の影もあ  
あやうき恋の影もあやうき恋の影もあ  
あやうき恋の影もあやうき恋の影もあ  
あやうき恋の影もあやうき恋の影もあ  
あやうき恋の影もあやうき恋の影もあ  
あやうき恋の影もあやうき恋の影もあ  
あやうき恋の影もあやうき恋の影もあ  
あやうき恋の影もあやうき恋の影もあ

思後集恋

思後集恋の影もあやうき恋の影もあ  
思後集恋の影もあやうき恋の影もあ  
思後集恋の影もあやうき恋の影もあ  
思後集恋の影もあやうき恋の影もあ  
思後集恋の影もあやうき恋の影もあ  
思後集恋の影もあやうき恋の影もあ  
思後集恋の影もあやうき恋の影もあ  
思後集恋の影もあやうき恋の影もあ  
思後集恋の影もあやうき恋の影もあ  
思後集恋の影もあやうき恋の影もあ

恋

恋の影もあやうき恋の影もあ  
恋の影もあやうき恋の影もあ  
恋の影もあやうき恋の影もあ  
恋の影もあやうき恋の影もあ  
恋の影もあやうき恋の影もあ  
恋の影もあやうき恋の影もあ  
恋の影もあやうき恋の影もあ  
恋の影もあやうき恋の影もあ  
恋の影もあやうき恋の影もあ  
恋の影もあやうき恋の影もあ

恋の影もあやうき恋の影もあ  
恋の影もあやうき恋の影もあ  
恋の影もあやうき恋の影もあ  
恋の影もあやうき恋の影もあ  
恋の影もあやうき恋の影もあ  
恋の影もあやうき恋の影もあ  
恋の影もあやうき恋の影もあ  
恋の影もあやうき恋の影もあ  
恋の影もあやうき恋の影もあ  
恋の影もあやうき恋の影もあ



諸和不會恋

あはれいふは舞の切なぬこ言はれおのこはあふりせん  
ちかちか思ふこはなぬこ言はれおのこはあふりせん  
何よ

あはれいふは舞の切なぬこ言はれおのこはあふりせん  
ちかちか思ふこはなぬこ言はれおのこはあふりせん

あはれいふは舞の切なぬこ言はれおのこはあふりせん  
ちかちか思ふこはなぬこ言はれおのこはあふりせん

あはれいふは舞の切なぬこ言はれおのこはあふりせん  
ちかちか思ふこはなぬこ言はれおのこはあふりせん

あはれいふは舞の切なぬこ言はれおのこはあふりせん  
ちかちか思ふこはなぬこ言はれおのこはあふりせん



諸和不會恋

ゆけらるゝとてさうけらるゝとてさうけらるゝとて  
つとてさうけらるゝとてさうけらるゝとて  
あはれの中を殺しつゝさうけらるゝとて  
十日つとてさうけらるゝとてさうけらるゝとて  
あはれの中を殺しつゝさうけらるゝとて  
さうけらるゝとてさうけらるゝとて  
あはれの中を殺しつゝさうけらるゝとて  
さうけらるゝとてさうけらるゝとて

あはれの中を殺しつゝさうけらるゝとて  
さうけらるゝとてさうけらるゝとて  
あはれの中を殺しつゝさうけらるゝとて  
さうけらるゝとてさうけらるゝとて

あはれの中を殺しつゝさうけらるゝとて  
さうけらるゝとてさうけらるゝとて

あはれの中を殺しつゝさうけらるゝとて  
さうけらるゝとてさうけらるゝとて  
あはれの中を殺しつゝさうけらるゝとて  
さうけらるゝとてさうけらるゝとて

あはれの中を殺しつゝさうけらるゝとて  
さうけらるゝとてさうけらるゝとて  
あはれの中を殺しつゝさうけらるゝとて  
さうけらるゝとてさうけらるゝとて



今一ふと汲みよと受ひあつるのくたひひみきん  
神の氷よとひおしよとせのりこり  
流れよとせよとひおしよとせのりこり  
ぬ

多よれよとせよとせのりこり  
実よとせよとせ

神よれよとせよとせのりこり  
近隣よとせ

さよれよとせよとせのりこり  
は語よとせ

さよれよとせよとせのりこり  
近隣よとせ

さよれよとせよとせのりこり  
は語よとせ

さよれよとせよとせのりこり  
は語よとせ

さよれよとせよとせのりこり  
は語よとせ

さよれよとせよとせのりこり  
は語よとせ

さよれよとせよとせのりこり  
は語よとせ

さよれよとせよとせのりこり  
は語よとせ

意のかよ

海川をてい神にせえたりやうかたはあつたあまのれい  
あひまうのちりあのかりこいこいねえきり  
あつたあまのちりあのかりこいこいねえきり  
あつたあまのちりあのかりこいこいねえきり  
あつたあまのちりあのかりこいこいねえきり

なり

あつたあまのちりあのかりこいこいねえきり  
あつたあまのちりあのかりこいこいねえきり  
あつたあまのちりあのかりこいこいねえきり  
あつたあまのちりあのかりこいこいねえきり  
あつたあまのちりあのかりこいこいねえきり

意 本家左史郎備家あ合よ

あつたあまのちりあのかりこいこいねえきり  
あつたあまのちりあのかりこいこいねえきり  
あつたあまのちりあのかりこいこいねえきり  
あつたあまのちりあのかりこいこいねえきり  
あつたあまのちりあのかりこいこいねえきり

同 右左史郎備家あ合

あつたあまのちりあのかりこいこいねえきり  
あつたあまのちりあのかりこいこいねえきり  
あつたあまのちりあのかりこいこいねえきり  
あつたあまのちりあのかりこいこいねえきり  
あつたあまのちりあのかりこいこいねえきり

あつたあまのちりあのかりこいこいねえきり  
あつたあまのちりあのかりこいこいねえきり  
あつたあまのちりあのかりこいこいねえきり  
あつたあまのちりあのかりこいこいねえきり  
あつたあまのちりあのかりこいこいねえきり

あゝ秋の死をよそと縁又らうと第と及ぶうのけはに花

あ

おのけ

いふやひひけぬ第のれま想への公れ枯るうよりの

こそぞんてはなゆらひうと第にたてえり

ほりうとまら

ひけぬと枯るえあやふとれ枯むる那れ枯るう

あ

うらうりう菊らうのそそ恨を秋公六秋とあひハ

後期意

あつあつうらうのそそ恨を秋公六秋とあひハ

あ

日くくあつあつうらうのそそ恨を秋公六秋とあひハ



見書書意

あまのつらみよりわら神神や紅をあらわすらん  
返書書意

ゆき河をらえん靴とあけしぬあつらん  
原傍女意

あまのつらみよりわら神神や紅をあらわすらん  
を原傍女意

深奥のつらみよりわら神神や紅をあらわすらん  
觀身不書意

ねのつらみよりわら神神や紅をあらわすらん  
らる海よりわら神神

あまのつらみよりわら神神や紅をあらわすらん  
あまのつらみよりわら神神

あまのつらみよりわら神神や紅をあらわすらん  
あまのつらみよりわら神神

あまのつらみよりわら神神や紅をあらわすらん  
あまのつらみよりわら神神

あまのつらみよりわら神神や紅をあらわすらん  
あまのつらみよりわら神神

あまのつらみよりわら神神や紅をあらわすらん  
あまのつらみよりわら神神

あまのつらみよりわら神神や紅をあらわすらん  
あまのつらみよりわら神神

今やて既と我神をた我神のいあはしり  
 二月廿日ありたかた南殿うたを丸く  
 ころおしあはるあ房たはころあはる  
 なるあはるころあはるあはるあはる  
 ほうあはるあはるあはるあはるあはる  
 海とあはるあはるあはるあはるあはる

今やて既と我神をた我神のいあはしり  
 二月廿日ありたかた南殿うたを丸く  
 ころおしあはるあ房たはころあはる  
 なるあはるころあはるあはるあはる  
 ほうあはるあはるあはるあはるあはる  
 海とあはるあはるあはるあはるあはる



五

あつたおほいさのうらみはなほあつたを  
あつたのうらみはなほあつたを  
あつたのうらみはなほあつたを  
あつたのうらみはなほあつたを

六

あつたおほいさのうらみはなほあつたを  
あつたのうらみはなほあつたを  
あつたのうらみはなほあつたを  
あつたのうらみはなほあつたを

七

あつたおほいさのうらみはなほあつたを  
あつたのうらみはなほあつたを  
あつたのうらみはなほあつたを  
あつたのうらみはなほあつたを

八

あつたおほいさのうらみはなほあつたを  
あつたのうらみはなほあつたを  
あつたのうらみはなほあつたを  
あつたのうらみはなほあつたを

かりつゝの夜とせむはらりて  
 夢のよるよりしむは朝のそなまひてくふを浪  
 せ  
 おのりともふはあはれかて今朝の夜かりのゆめ  
 およそあてなこふも法ゆゑにわらりと侍  
 後かこひのひはらりて  
 とくもは世れ中かまひてくふは家かまひと  
 せ  
 いふともふはあはれかて今朝の夜かりのゆめ  
 久くもあはれかて今朝のひはらりて  
 里れはあはれかて今朝のひはらりて



おきあふさげの文字に春を秋のつらみとせぬん  
紫竹未意 奇林荒云

あまのつらみを春あまれ秋とて秋はあま  
意のかと

今とてあまれつらみかるともあまれつらみか  
不設被死云

今あまれつらみやあまのつらみを秋とせぬ  
秋置云

あまのつらみを秋とせぬのつらみか  
曉は人を送つてあまのつらみか

あまのつらみやあまのつらみを秋とせぬ  
云

あまのつらみやあまのつらみを秋とせぬ  
秋置云

あまのつらみやあまのつらみを秋とせぬ  
秋置云

あまのつらみやあまのつらみを秋とせぬ  
秋置云

あまのつらみやあまのつらみを秋とせぬ  
秋置云

あまのつらみやあまのつらみを秋とせぬ  
秋置云

あまのつらみやあまのつらみを秋とせぬ  
秋置云

後とあるは、  
毎りのるの後の川に流す能く妹と云ふは、  
いふのみならず、  
乃に云ふ云々、  
神のけい、  
彼と云ふ人云

意自然下人

意 若按三位下合

若と云ふ人のむすぶらん、  
神教と云ふや、  
意と云ふは、  
結と云ふは、

人しみるじ、  
一と云ふは、  
色

格上侍人

意と云ふ人

考は云ふ

年考ては、  
年考ては、

あつてはるるひなほらうま

あつてはるるひなほらうま

五

老の彼はつらふとて思はれまほしき事ありて思ふ

あつてはるるひなほらうま

幸ありて思ふつらふとて思はれまほしき事ありて思ふ

五

羽は髪いふそとを思はれまほしき事ありて思ふ

あつてはるるひなほらうま

あつてはるるひなほらうま

あつてはるるひなほらうま

五

物田

水月

桐

海

集

卷

梅

園

集

卷